

ネイティブ・アメリカンの世界 1

阿子島 香

[東北歴史博物館館長講座概要：歴史博物館グローバル紀行⑦]

2024 年 10 月 26 日

講座要旨

今年度の館長講座もあと 2 回となりました。ご来場いただき、有難うございます。「歴史博物館グローバル紀行」と題し、世界各地の博物館を、皆さんと一緒に巡っています。考古学と歴史を中心にして、海外のミュージアムを訪ね、各地の展示と郷土史を、世界史の視点から考えてきました。お楽しみいただけていますでしょうか？ 次回は今年度最後の講座で「ネイティブ・アメリカンの世界 2」を予定しています。歴史博物館を広くみれば、世界的にも「博物館学」という研究分野があって、日本の養成課程では「学芸員資格」を取得する要件に多くの関連科目があります。今年の館長講座は、いわば「博物館展示論」と、「世界史の散策」とのクロスオーバーと考えていただければ幸いです。お話の内容では、時々、旧シリーズすなわち「東北グローバル考古学」の全 24 回の内容と関連させつつ、参照しています。旧シリーズは、引き続き東北歴史博物館の HP にて、講座概要を公開しております（多くは「読む館長講座」として、改めてエッセイとして再構成したものになっています）。あわせてご参照いただければうれしく存じます。

考古学とは、人類のあらゆる過去の世界を、残された物質的資料（遺跡・遺構・遺物）から復元し、歴史を考えていく研究分野です。今回講座の対象はアメリカ考古学で、館長が 1980 年以来、40 年以上にわたり研究してきた地域です。その中から、前回に引き続き、近年日本でも重視されるようになり、博物館法改正の背景にもなっている「文化観光」の参考になるような遺跡群をご紹介しますと考えました。

アメリカ・インディアンは、またネイティブ・アメリカンとも呼ばれます。米国連邦政府によれば、現在 566 の民族（部族）集団が認定されています。加えて各州政府による認定は、約 70 部族になります。2010 年の国勢調査では、ネイティブ・アメリカンの人口は、約 309 万人となっています。彼らの居住地はアメリカの西部地域に保留地（＝居留地、Indian Reservation）が多く存在し、独立した自治区になっていることが多い現状です。しかし、これは歴史的な理由、すなわちヨーロッパ人が到来してから植民が進み、合衆国独立のあとの西部開拓の歴史の中で、元来の居住地を奪われて、分散し、あるいは居留地に移動させられた経緯によるものです。もともとは、全米のあらゆる地域に、アメリカ・インディアンの諸部族が多様な環境に適応しつつ居住していました。

すべてのインディアン諸族の祖先は、人種的にはモンゴロイド系に属しています。ホモ・

サピエンス以前の人類は、南北両アメリカ大陸では、発見されていません。すなわち、インディアン諸族の祖先は、新人の時代になってから、アジア方面より移動してきました。ベーリンジアと呼ばれる氷河時代の陸橋（シベリアとアラスカの間の広い陸地）を經由して、北米そして南米へと渡来しました。移動には何回かの波があったと考えられます。かつては、北米の氷河が縮小して「無氷回廊」ができるまでは、渡来は不可能で、北米のパレオインディアン文化のクロービス期が最古であるという定説でした。しかし、約 15000 年前を遡る遺跡が次々と発見されていて、チリ南端に近いモンテベルデなど、南米への渡来も遡っています。渡来のルートとしては、海岸に沿った「海の道」が有力視されます。氷河時代が終わり温暖化すると、北米全土では新しい文化へと変化し、地域性が豊かな完新世の諸文化が確立し 15 世紀まで展開しました。今回は、その歴史から、東部の森林地帯で栄えた「ミシシッピ文化」を取り上げます。

この文化は先行する東部森林地帯文化（ウッドランド文化各期）から直接発展したもので、9 世紀～15 世紀位の間、ミシシッピ川流域の広大な一帯に分布しています。地域性もあって、中央ミシシッピ文化、フォート・エンシェント文化、南部アパラチア文化などの類型があります。カホキア墳丘群・州史跡（Cahokia Mounds State Historic Site）は、1982 年に世界遺産に登録されています。遺跡群は、ミズーリ州セントルイスの東郊外、イリノイ州にあって、ミシシッピ川とミズーリ川という大河の合流点付近のアメリカン・ボトムと呼ばれる湿地・氾濫原地帯に立地します。

カホキアは、北米先史時代において最大規模の土木工事が行われた遺跡です。その中心になるのは、Monk's Mound（神官の大塚）と呼ばれる人口丘で、4 段のテラスがあるプラットフォーム・マウンドです。高さ 31m、長さ 315m、幅 241m に達する巨大な墳丘です。全部が人力で築かれました。その南は大広場（Grand Plaza）になっていて、神聖性をもつ競技が行われ、また南西では天体観測機能を持つ円形配置柱列と中心柱がありました。神殿丘とは別に、埋葬墳丘もあって、特筆されるのは第 72 号マウンドです。有力者の豪華な服装品、特別な埋葬と、地下に埋められた多くの遺体（殉葬か）とが一体で、150 年間にわたり構築されたとされます。カホキアは一大都市空間を構成していました。最盛期である 12 世紀には、人口は 2 万人を超えていたと推定されます。木材と草葺き壁の家屋は密集していました。街並みは防御的な材木堀で囲まれていました。中心部を囲む材木堀もあって、居住者の社会階層で区分されていたようです。ミシシッピ文化の広大な地域から、多くの交易品がもたらされました。遠方からの貝殻、自然銅、雲母鉱物、良質石材ほか、河川の水運による交易ネットワークが確立していました。生業の基盤は、トウモロコシ農耕で、10 世紀以降に人口が急増しました。複合農耕（カボチャ、マメ類）、狩猟採集も、生業を補完しました。大河と支流での漁労も重要でした。北米東部の森林地帯に栄えたミシシッピ文化でしたが、14 世紀ころには衰退し、カホキアも無人となりました。衰退していった要因には、諸説があります。北米大陸では、国家形成の段階に至った古代文明が出現することはありませんでした。

館長はアメリカ考古学会年次大会（2010）に際して、カホキアを訪ねる機会がありました。世界遺産の博物館や、史跡公園の状況を、撮影した多くの写真でご紹介します。

トピックス

以上は、全体の要旨です。以下に、スライドで解説した内容から一部を選んで、项目的に紹介します。

- ・ミズーリ州のセントルイスで開催されたアメリカ考古学会年次大会は、**Society for American Archaeology** の創立 75 周年の記念大会で、研究の歴史に関する分科会も目立った。留学中に私が唯一の日本人学生として師事したビンフォード先生（Prof. Lewis Binford）を記念する分科会もあって、先生ご臨席のもと、私も研究発表して緊張した。翌年にご逝去されてしまったので、貴重なことであった。昼食会では、ジェレミー・サブロフ先生はじめ、ゆかりの御歴々が並んだ。講座で解説したのは、その大会の合間を縫って、日本人旧石器研究者お二人と、カホキアマウンド史跡公園と博物館を訪問した際の写真である。

- ・アメリカ・インディアンには、一般に「悪役」というイメージが付いてまわるが、歴史学的には、これは誤ったイメージである。西部開拓史の中での迫害、繰り返された条約破棄、人種差別の歴史と、なお残る差別意識がある。またハリウッド西部劇の影響も非常に大きい。講座では、平原インディアンの古写真や、バッファロー・ビルのワイルドウェストショーを紹介（1905 年のショーで、スー族のシッティング・ブルが、第 7 騎兵隊のカスター隊長を殺害する演技。史実とは異なる）。インディアン居留地の全米分布図、大西部の 19 世紀で、インディアン諸部族との闘いのあった地点の分布図、ヨーロッパ人渡来以前の、北米の文化領域分類図などを紹介して、「悪役イメージ」と史実との違いを説明した。（講座後の質問セッションで、聴講された方から、インディアン文化についての、イメージが変わったという感想をいただいた。）

- ・人類の進化史との関係では、北米、南米の両大陸ともに、旧人から新人への進化はなかった。すべてのアメリカ・インディアン諸族は、新人になってから、アジアから渡来してきた。後期旧石器時代の主要遺跡、渡来ルート、人類大拡散の最初の文化期であった、パレオインディアン文化のクロービス期、フォルサム期を説明。もっと古い遺跡も存在することを解説。近年、研究が進展。

- ・パレオインディアン文化の発見は、1926 年のニューメキシコ州フォルサム村。絶滅動物の化石の中に埋まって、有樋尖頭器が発見された。デンバー自然史博物館が調査して、太古の人類を実証したのであったが、発見後しばらくの間は、学界では懐疑的な意見が多かった。投槍器を使用した大型動物狩猟民の人々であった。

- ・初期の開拓者たちは、ミシシippi文化や、チャコ文化などが残した、眼前にある巨大遺跡に驚嘆した。北米各地に、大規模な土木工事による廃墟が散在していた。初期の探検家たちの個別ルートを紹介。デ・ソト、コ罗纳ード、ルイスとクラークなど。そのうち、デ・ソト

の3回の探検で、ミシシッピ文化の廃墟が記録されている。また、北米南部・東部には、チェロキー族や、モホーク族・モヒカン族（独特のヘアスタイル、頭頂部に毛髪を残して両サイドを剃る、パンク・スタイルの語源で知られる）をはじめ、大陸の全土にアメリカ・インディアン諸族は居住していた、その後の不幸な歴史の中で、インディアン文化は西部という認識が生まれた。

・北東部のイロコイ部族同盟は、『古代社会』（1877）を著したルイス・ヘンリー・モルガン（Lewis Henry Morgan）が研究して有名。モルガン（モーガンとも書く）は進化主義人類学の立場で、野蛮・未開・文明の段階進化学説を展開したのであったが、のちにエンゲルスなどがモルガンの著作から理論を発展させて、マルクス主義の古典的著書として読まれて、政治的にレーニンにまで及ぶ広範な影響を与えた。エンゲルスによる『家族・私有財産・国家の起源』（1884、岩波文庫 1979）が代表的である。が、モルガンは他にも北米先住民の住居形態など幅広く研究し、19世紀後半の進化主義人類学の代表的研究者であり、『古代社会』も、元来は人類学の学術研究書であった。一方で、当時の西洋近代社会を社会進化の到達点とする考え方は、アメリカ先住民諸族を「劣った文化と人々」とする立場に通じる。当時の一般的思潮ではあったが、帝国主義の時代に、アメリカ・インディアンへの支配を正当化する背景思想的な役割を果たした面は否めない。

進化主義人類学は、20世紀に入ると、文化相対主義を標榜するフランツ・ボアズ指導下の、実証主義的な北米民族学の時代になると共に、影を潜めていった。レスリー・ホワイトやジュリアン・スチュワードによる新進化主義人類学が台頭するのは、1950年代になってからである。（なお館長講座では、令和3・4年度に、新・旧の進化主義人類学について、しばしば触れている。）

・今回探訪する博物館は、Cahokia Mounds State Historic Site（カホキア墳丘群イリノイ州歴史遺跡）で、遺跡公園と史跡博物館が併設されている。この遺跡は、1982年に世界遺産に登録されて、その面積は約8.9平方キロある。博物館は Museum Interpretive Center（解説センター）というガイダンス施設でもあり、1989年に開設されて、巨大な遺跡群への案内拠点となっている。多くのスライドで解説。史跡自体だけに限定せずに、地域の太古から近代直前までの歴史を概説する内容になっている。来場者には、地域全体の大きな歴史を提供する中で、史跡の詳細な解説があるという構造である。

・なお、日本での史跡博物館は、ともすると当該史跡に限定された内容となりがちであり、比較材料として、一考する必要があるように思われる。地域史のまとまりとは、代表的な史跡にこそ実態が反映されているものであり、行政的な境界とは一致しないのが本来である。また行政的な施設の性格は承知した上で、文化財全体の保護へ向かう総合を考える時期であろう（館長の個人的意見）。カホキアは、アメリカン・ボトムという特別の環境の中で生成し、かつミシシッピ文化という州境をはるかに超越した歴史の変遷の一部ということである。この問題は、歴史学研究と行政政策との間にある宿命を、改めて想起させる。

・多くのジオラマ、現物の出土資料、パネル、視聴覚展示（モニター）などを組み合わせて

の総合展示となっているが、これは現代の世界共通の博物館学の手法である。説明パネルでは、共通の形があって、現代の考古学者（その雰囲気、映画で人気だったインディアナ・ジョーンズ風）が実証的に過去を解明、復元して、その内容を先住民（ミシシippi文化人）が復活して、私たちに語るという構成になっている。既になくなった人々の、文化の復元の手順を説明するので、私は仙台市長町の「地底の森ミュージアム」の「富沢博士」を連想した。過去の歴史は、自然に現れてくるのではなくて、現代のさまざまな研究手法で、ひとつずつ明らかにされていく、という非常に教育的ともいえる展示手法である。

- ・史跡ガイダンス博物館でありながら、また考古学的地域の通史展示にもなっている。その概要を、多くの撮影スライドでご紹介した。ここでは、文章で概説してみるが、やはり写真には及ばないことをご承知願う。

- ・北米最初の広域的な文化は、パレオインディアン文化であり、約 15000 年前～9000 年前にかけて、北米全土に拡大していた。冷涼で乾燥した気候の下、広く草原植生が広がっていた。多くの絶滅動物が生息していた。マンモス、オオナマケモノ、大型のバッファロー（絶滅種のアンティクス）。当地域の石器を展示。博物館の展示は、パレオインディアン文化期から、近世の接触期（プロト・ヒストリー期という、ヨーロッパ人との接触時代で、ウマや銃などが、先住民同士の交易などで、どんどん奥地まで入っていった）まで。

- ・約 9000 年前以降に、環境が温暖化すると、北米の各地域では、それぞれの地域独自のアルカイック文化（古期）に移行、すなわち完新世適応の諸文化が展開した。（館長注：この動きは、日本列島では、縄文文化の展開にあたるもの）。北米東部の文化領域では、森林環境適応の文化であった **Woodland culture area**（ウッドランド文化）が展開した。ウッドランド文化は、次にミシシippi文化に発達していった。

- ・約 950 A.D.頃に、トウモロコシ農耕が導入され、拡大した。トウモロコシ（**Corn = Maize**）農耕は、集約的な農業が可能で、急激な人口増加をもたらした。人々の集住が起きて、大きな文化変化をみた。北米の農耕文化の基本型は、いわゆる「3点セット」で、トウモロコシ、マメ類、カボチャであり、多くの品種が育成され、分化した。**Maize, Beans, Squash** である。それらの組み合わせには、地域と時期による多様性が認められる。ミシシippi文化は、マメ類が比較的少ないタイプであったとの指摘もある。トウモロコシ農耕への集中は、人口増をもたらす一方で、栄養的に問題を生じた可能性もある。文化形態の長期持続性という観点での問題である。狩猟や漁労との関連もあるが、北米でのマメ類は、タンパク質の補給という意義もあった。

- ・ミシシippi文化では、遠隔地間の物資交易が顕著であった。大河と支流による水運、小舟による長距離移動が行われた。11 世紀以降のミシシippi文化の急激な拡大を、大爆発（ビッグ・バン）と表現する考古学者もいるほど。トウモロコシ農耕の集約化と、地域間交流の発達、アメリカン・ボトム地域での社会的、かつ宗教的な中核地域化をもたらした。同様な中核地域発展は、北米東部、南部一帯で起きた。

- ・ミシシippi文化の領域は、非常に広大な地域にわたるが、共通する文化的特徴が認められ

る。プラットフォーム・マウンドの造成、トウモロコシ農耕の隆盛、土器に貝殻粉末の混和剤を入れるという技術、広大な交易ネットワークの構築、社会的な不平等の確実な証拠、首長層への権力の集中、集落が階層化している居住域の方式、「南東部祭礼様式」の複合の存在、たとえばチャンキイという特殊な競技と競技場（円盤形の厚い石製品を転がす）、「鳥人間」の象徴的な岩版、などがあげられる。

・社会進化的には、首長制段階へと、社会統合が確立しつつあったとみられる。古代国家の形成へ向かう途上と評価されるが、しかし 15 世紀頃までに、社会システムの大規模化が停滞ないし崩壊した。北米では、古代国家は成立しないままで、ヨーロッパ人の到来を迎えた。

・カホキアの古代都市は、材木堀で区画され、エリート居住区と、庶民のエリアとが区分されていた。外郭にも材木堀の囲いが存在した。多くの密集家屋が街区を構成していた。西暦 1150 年頃の最盛期には、カホキアは約 2 万人の集住があった（15000 人とも）。この頃の気候は世界的に温暖で、ヨーロッパでは中世温暖期と呼ばれる。中心部のマウンドは特別の存在で、側辺は急傾斜であり、頂上部は平坦な、プラットフォーム・マウンドであった。上には神殿があった。人々の住居は、各階層とも木材の柱、平地住居で、急傾斜の屋根は草ぶき、壁は泥土と植物の骨組み（土壁塗り）が主であった。同時代の世界を見ると、ヨーロッパでは、ロンドン、パリ、などよりも多くの人口を擁する都市文明であった。もちろん、中国の開封（北宋の都）、東ローマ帝国のコンスタンチノーブルなどは、けた違いに大きい都市であったが。（アメリカ人の一般的なヨーロッパ中心史観に、少しチクリか：館長注）。

・最大のマウンドは、「神官の大墳丘」**Monk's Mound** で、第一に神殿機能を有していた。テラスは 4 段築成になっていて、高さ 30.5m、長さ 316m、幅 241m という、超巨大な塚で、北アメリカでは最大規模の人口丘である。すべてが、人力で築かれた。その周囲に「大いなる広場」**Grand Plaza** があって、石製の円盤を使用する競技 **Chunky** が行われた。チャンキイは、ミシシッピ文化の崩壊後も、南東部のインディアン諸族の文化に残っている。

・ミシシッピ文化のマウンドには、3 種類ある。プラットフォーム・マウンド（広い平坦なテラスを造成、何度も繰り返しの構築で、巨大化する）、コニカル・マウンド（最終形が、円錐形になる）、リッジ・マウンド（尾根形の人口丘）である。リッジ・マウンドは、見掛けより大規模で、地下にある埋葬に、大量の副葬品をとめない、殉死遺体（？）を伴う。やはり継続して巨大化する。カホキアの第 72 号マウンドは、最終形は尾根形マウンドとなつて、約 150 年にわたり継続したとされる。第 72 号は、社会的エリート（支配者層）と、一般ないし下層民との分離を示す様相がある。大量の副葬品、威信を示す財物、多数の殉死者（あるいは生け贄）、継続した埋葬方式が明らかになった。ウィスコンシン州立大学ミルウォーキー校が、1967～1971 年に発掘調査を実施した。巨大マウンドは、長期的な葬送の繰り返しのより形成された過程が判明した。地下の大量埋葬がパネルで展示。堆積度を細かく区別して発掘調査することで、各回の人力による積み増し行動を解明した。人力で、カゴにいった土を次々に上に積んでいく。（館長注：考古学の微細層位ごとの発掘調査、東北地方の貝塚調査などでも用いられる手法。洋の東西を問わず、考古学の方法には共通点があるも

の)。

・マウンド構築には、強力なリーダーシップが必要であるが、どのような動機付けのメカニズムが存在したのか、なお課題が残されている（館長注：これは、世界の多くの古代文明の精神構造の分析課題であろう）。

・カホキア都市と社会は、衰退するのも急速度であった。西暦 1350 年頃までには、人々はカホキアの地を去って行った。ミシシッピ文化の衰退の原因をめぐっては、諸説がある。（館長説。多くの要因が、相互関連していたのではないか、ミシシッピ文化を急発展させた諸要因の関連が、今度は社会プロセスの進行につれて、逆に矛盾をはらむようになり、文明崩壊へのサイクルになったのではないか。システム内部のフィードバックが、文化プロセスの進行につれて、矛盾の増大に向かう方向となった。気候変動は、大きな引き金として作用した可能性もある。また階層社会の分化により、社会的紐帯の求心力が弱まり、争乱が内包されることもあったかもしれない。）

気候変動の激化、トウモロコシの過度な集約栽培による土地生産力の低下、集団相互の間の戦争（砦のような防衛的な街が示す）、集住による衛生の問題、人々の広域移動の活発化による疫病問題、などが指摘される。もともと、アメリカン・ボトム地域は、巨大な湿地帯であり、氾濫原であった。

・神官の大塚頂上に立って、当時を想像してみよう。現在は史跡公園が広がっているだけだが、この周辺一帯はすべて密集した街並み、行きかう人々、多くの囲いの区画施設、様々な職人の工芸製作、大河に続く川面には、多くの小舟、北米各地からもたらされる物資、多くの部族の人々の混在、そして偉大なる首長の大塚、塚上の神殿、神聖なる儀礼、などが思い浮かぶ。

・想像と共感の遺跡探訪は、どの国、どの時代でも、実証的な考古学、歴史学に基づいて、現在訪ねる人々には、「文化観光」となるのだろう。文化観光とは、迎える側の経済的事情のみではなく、探訪する側の人々のものであろうし、そうでなければならない。

（本稿は、館長講座での配布資料、講演内容に補足したものです。）